

随想

向井田 郁子

ワニと賢治

二〇〇六年、岩大ミュージアム本館は展示内容を大きくなりニューアルした。見やすしばかりではなく、内容も一段と充実して、今までボランティア自身も抱いていた岩大の印象とはまた違った面を見せる展示物が見られる。

このなかでも特に目立つのが、階段下の第三展示室「家畜のいろいろと解剖模型」のコーナー。家畜標本の点数の豊富な同室に家畜のほか野生動物のカモシカ、アザラシ、ワニの剥製標本も新たに加わった。

ワニの剥製は、「大正十一年（一九一二年）正月、当時シンガポール在住だった大西英隆医師が島地大等に寄贈したもの」であり、箱書きには「清岡医学士より伝授」とあることが説明書に書かれている。島地大等（一八七五～一九二九年）は盛岡市北山、願教寺の住職を務め、盛岡高等農林に在学中だつた宮沢賢治は島地大等師の法話を聞いていたく感動し法華經の世界に目覚めたという。宮沢賢治の思想的な指導者島地大等の手に届けたのが清岡医学士だつたことに私は盛岡高等農林をめぐる盛岡市民の人の輪の不思議さを感じ、驚いた。盛岡高等農林学校の開校は、二代目盛岡市長清岡等の働きを抜きにしては考えられないという盛岡市民は未だに少なくない。

清岡等は一八六三年盛岡で生まれ、父親行三の勤務の関係で少年時代を秋田で過ごし、後に旧制秋田中学校となる太平学校を卒業。一八八二年から一八九四年まで岩手県に勤めた後、一八九四年に初代市長目時定孝の跡を継いで盛岡市長を一九〇一年まで7年間務めた。在職中は盛岡の街の近代化をハード、ソフト両面で進めなければならない時代を受けて、盛岡電燈会社、新聞社（岩手日報）起業などの事業を手がけた。盛岡高等農林学校の誘致運動もそのうちの1つ。

一九〇一年に総選舉に出馬して原敬に敗れてからは盛岡電燈会社の社長などを勤め、盛岡市の近代都市化に市長退任後も多いに貢献し、一九二三年、第三の人を送った吉乃鉱業小坂鉱山の宿舎で六十歳の生涯を閉じた。

清岡等の長男博見は医師となり、のちに上海の病院などに勤め、アジア地域でグローバルな活躍をしたことが一部の記録には残っている。シンガポール在住の大西英隆医師が知人の島地大等あてに贈ったワニの剥製を清岡博見の手に託して届けられたとしても不思議はない。しかし、なぜ島地大等の手にワニの標本が届けられたのか。それは未だになぞである。

上田の杜



イリオドリ（アヒル）
シナガボール在住の医師か
島地大等に送
られたワニの標本
シナガボール在住の医師か
島地大等に送
られたワニの標本



キャンパスの植物

やつと咲いた

ハンカチノキ（ダビディア科）

農業教育資料館脇にある「ハンカチノキ」が植



栽から約二十一年たつて初めて花が咲きました（五月十五日）。風にゆれる姿が白いハンカチを振つているように見えます。これから名付けられましたが、ハトが飛び立つ姿にも似ています。ハトカチのよう白く見える部分は、実は長短二枚の苞で球状の花を守るように包んでいます。このハンカチノキは元岩手大学工学部長村井先生から寄贈されたもので、村井先生宅で十年、大学に植えられて十一年と約二十一経つてやつと見事な花が咲いたのです。（高橋一雄 佐々木アツ子撮影）

編集後記

創刊号を出してから七ヶ月経つた。

年二回の発行を約束した手前、六月下旬になつて編集会議を開いた割には、仕上がりが早かつた。向井田さん始め広報グループの諸氏、特にパソコンの野中さんは今回もご協力を頂いた。やはりはないが、「私とボランティア」第二号は全体として創刊号とあまり変化はないが、「私とボランティア」号からも続けたいと思つていて。積極的な寄稿を期待したい。

編集子としては原稿の整理に悲鳴をあげる位のボリュームがあればうれしい限りだが、現実は程遠い。しかし今号からも新設した。「随想」「事務局から」を新設した。次号からも続けたいと思つていて。積極的に活動を実施しているため、何とか紙面を埋めることはできる。

今後はマンネリにならないよう他県のボランティア活動の実情を聞いたり、会報などを取り寄せて参考にしたいと考えている。（村谷）

今後の事業は左表通り行う予定であります。皆様の活発なるご参加をお願い致します。

事務局から

時 期	事 業 名
7月26日	教育資料館・標本室研修
8月下旬	賢治関連の研修（小岩井方面）
9月初旬	賢治ツアー（秋版）
10月	イベント同時開催映画・展示会
11月	三内丸山遺跡見学
12月	会員交流会（反省会・懇親会）
1月～3月	第4期養成講座受講（聴講）
1月～3月	パソコン研修（希望者対象）